



四方赤良伴

珍之

2819



久太

自序

無^ブ鹽^{エン}二^ニ與^{イシ}石^シ印^{モチ}乃^チ不^レ棄^ス也^{ナリ}あり河^カ豚^ブ
 阿^オ多^ダ福^フ乃^チ称^ナま^シじ^ヤ醜^ウ婦^フの^ノ
 内^{ナイ}助^{ジュ}あ^リる^{コト}ヨ^クり^ニ例^レ多^クし^ト思^ヒ
 ころころ一^ニしぬ^ルい^ハえ^ト書^ク日^ニ林^ノ梓^ノ
 せん^トと^モぬ^カ不^レお^モ好^シとい^ハお^もひ^ハあ^らう^ク
 其^ノも^トせ^いと^シ投^ナ出^スを^シあ^らは^しる^{コト}油^ノ揚^ク
 な^らず^ニす^べら^うく^らく^ら口^ノ乃^チあ^らや^うら^う

久太

久太

へ13

2819

へ13
2819

旧
漆
2132
141

たゞの事しのし

ふ女・永庚子春

東都貧士 粥腹得心



多福面跋

予多福が人とあるを考ふる小の豚は似て
毒の味甘くして畑にたまひ小はた
び乃又人誣ふ事あるを笑ひの
口よあるその容貌をきくみれを
至昭君が以羊よあるも草干かぢり
あまもさのさい見識のうたこも
つらも顔と頬多のどし三平自慢

くれども日來のうらふ色不隔壁も茶で茶の
 ぬ茶の響ハ狭ひ敷屋の庭此訓あま福く
 世上ももあまるもたまのいしひれ白粉水
 鼻乃低小つくもし東蒙子そが侍を化
 里一巻とあひその書をだて書仕廻へ
 横子すうちの立白は菰是こそ予が致
 る人めれや大志の人は志まよあ特
 康子初春
 朱樂管江

讀阿多福面
 夫美人ハ天上より落牡丹糞ハ棚うさされ
 さうさうはけりも硝子の危うらんより立白ま
 薦の金うらんよあつらばあさくの面もかぶ
 屏物くる貴訓がしをれもあ卑しとんとも
 燈籠鬚の透るるかぞて二枚櫛乃歯よさぬ
 きせぬお子板のとのさぬかまの駒下駄の娘
 さいふ見とあてぬれよよかんぼり耳

より年々々々世れ佩練ともあれりと今
大通の通の中へらの一通と虫の世に
破鴉よとち蓋とそよ粥後得ん後々々
ことさふれどあふべし

安永庚子孟春 四方赤らぬ速



當世阿多福假面

粥腹得ん著

近年時花ぬおチアニ教訓本と狼お
燗多通りのぬひ古烟袋もさいくよせ
みで紙縷の世話が茶一そ紙がせらの序
も列り。禮自臭を話本よ坊くじと益軒
おやぢめぬの刺刺二三紙吞るよあんと
かろとゆめておられよ。ヤア忍つとをち地

春^{つぎ}屋^やう来^きてうし^{ヒツリ}しと振^うち帯^{おビ}のき^きし^り
お後^{おのち}女^にらぬ^なし^りく面白^{おもしろ}や東^{あづま}の源^{みなもと}河^が洲^す崎^{さき}
もも舟^{ふね}屋^やのあ^あ緑^{ろく}南^{みなみ}上^{かみ} 小^こ川^{がわ}海^{うみ}原^{はら}う^うる^る 袖^{そで}
和^わ後^ごあ^あの^のに^にッ^ッ乃^の谷^やの^の戸^とと今^{いま}新^{あらた}出^い初^{はつ}の^の裳^も
北^{きた}の^の梅^{うめ}の^の緒^{いと}を^を二^に紗^さの^の香^かと封^{ふう}ド^ド文^{ぶん}引^ひくり
尾^おして^{して}釣^つても^もモ^モフ 物^{もの}と^とま^まひ^ひる^るは^はあ^あの^の虫^{むし}を^を
そ^そも^もく^くど^どつ^つち^ち風^{かぜ}が^が吹^ふいて^{いて}糸^{いと}く^くじ^じと^と草^{くさ}屋^やへ
は^は本^{ほん}陰^{かげ}さ^さご^ごめ^め 魚^{いさな}方^{かた}さ^さふ^ふ乃^の刑^{けい}毛^{もう}序^{しり}あ^あと^と

い^いつ^つと^と振^うち^ちを^をゆ^ゆて^て水^{みづ}を^を流^{なが}ら^らう^うと^と揺^ゆり^りく^くる^るを^を
あ^あう^うる^るく^く乃^のこ^こお^おと^と流^{なが}り^り乃^の多^{おほ}く^くを^を流^{なが}す^す事^{こと}あ^あ
の^の後^ごを^を完^{かん}ふ^ふし^しあ^あ笑^{わら}ひ^ひを^を風^{かぜ}吹^ふか^かす^す乃^の自^{みづか}ひ^ひ騰^{たか}興^{きよう}
よ^よ山^{やま}乃^の神^{かみ}隠^{かく}れ^れで^でう^うる^る虫^{むし}あ^あの^のお^お口^{くち}お^お物^{もの}を^をや^やつ^つ
あ^あも^も流^{なが}る^る水^{みづ}の^の流^{なが}れ^れ合^あわ^わて^てる^るあ^あり^りは^はし^し
ホ^ホシ^シニ^ニ 船^{ふね}が^が因^よ果^ぐう^うと^と世^よの^の乃^の娘^{むすめ}を^をや^やら^らぬ^ぬ内^{うち}を^をめ^め
な^な乃^の世^よ結^{むす}ば^ば仕^して^てや^やら^らせ^せら^らぬ^ぬま^まが^が聖^{せい}人^{にん}
な^な乃^の結^{むす}ば^ばの^の虫^{むし}あ^あの^の娘^{むすめ}を^をや^やら^らせ^せら^らぬ^ぬま^まが^が聖^{せい}人^{にん}

一之めがよりの徳言功容徳のやほしく
情よく言ひ教ありて中他よりあか
功徳針子ひさ容を温雅うやう
介らむむくくやくいやみちくとさくせ
給ひ一ニみ年あふれ聖人の心とい
とんごいつちいつそ嬉しい昔も今も
さひも低もい注文よとつむさ女中の店
さしひけぬよまよきとく世りよ出ぬが

涙して女大子姫鑑かんで嘔て假名よきて
能合息此約振うてあれを出入乃本屋へ
つてやま一晩毎根よ續じ方の家
身脩り主婦中よく徳あつくと業ある程
いぬながう妾ホが振なまの朝う後ま
うれて味あつる来うきと人乃まの時よ
勢刀もよふ取つよといふあせあ一あ
あきまご相ドレ年始乃由経を亭うま

乃代りよみ出してお急よあひとつけは
あんまりは味来かまはるおとあがり口
送つてぬきまはるおとあがり口
とく火焼とまらぬおとあがり口
るもつらりあはるおとあがり口
魚斗も付くまはるおとあがり口
ろ。八盃ごよせんまはるおとあがり口
煮てと。中々に女もあはるおとあがり口
乃軍法計略

南堂さんの猫戸ぬまら子あら乃人の
森酒乃肴よあてやつておとあがり口
はくおとあがり口。乃洗滌おとあがり口
よみ孤でもおとあがり口。おとあがり口
いけまなて能く日おとあがり口。乃提燈おとあがり口
らぬ。用ん去いおとあがり口。乃文庫おとあがり口
下げよ。正月くおとあがり口。乃師おとあがり口
おとあがり口。乃新巻林おとあがり口。乃茶庵集おとあがり口



寺社ど佛ぶつ閣かくとてかこころをよつてありく
江戸見あやどのかきりうがいのちやうよびでか
け子ぐわお小女があひひく。新堀うりて
来さる。縁えんつくろ物さよやつてえんうとほさ
まよいひ付つてつぎつりて格か子こ乃ある。本ほんきを
うらへりやと。ッッさぶらうとさおさる。と
何とつらうあまの極ごくそそわあへありつきの
内うちでおのあまをさいおでゆのせう院いんのあまの

姫ひめひらら小萩こはぎ十花じゅうか乃は本ほんよ十花じゅうか乃乃は
あまのちやうとくともおのれやまあやうとさ
いそぶいそぶはは持もちたががけけけ子こが江戸へついで
この三月と居いとびとつげのさそで
いそぶいそぶぬうあやがはあひく。と
あまらつとて生なやあまのちやうよびで
あまびとつとあまのちやうよびで
立た立たあまのちやうよびで

しめよといふに... 年北より二十斗。今おもむき里江よりつと
傍りかよふに... かゝるものも... ねいあ... けが... おはやけい... おうく... くらや... せんを

親が... ても十三... 物う... のよ... 一... うく... おう... せ... せ... せ...

2

ふんよすでちのりていのまのせよそのうし
ちくねねのちが十六乃七月
おのりよあかあそづととねらちつとあそをね
はまよいぬとねも大指で高買の人を付取の
よいのちあくあり。む八らつらつれぬ
て。ねも妻へあつてく。お屋を女もさつに
おねがうけお茶の湯らる具とあつて
おねがよ。おねがうけお茶の湯らる具とあつて

お屋を女とりの後代あやぢ。主屋の人
とらひお屋。お屋つらつら運のころお
男あつ。こんな時よ米つまてお屋つらつら
ひお屋あけお屋。お屋つらつら運のころお
お屋を米とね。お屋つらつら運のころお
と。お屋つらつら運のころお屋つらつら
あつて。お屋つらつら運のころお屋つらつら
お屋つらつら運のころお屋つらつら

なくさーしんで舞ぶ〜〜〜久々〜ん
〜〜〜
のちい〜
よあ〜
又〜
後〜
大〜

わ〜
信〜
つ〜
〜
お〜
善〜
〜
そ〜

...

様と幼きちがひうちのちがひのび合ま
まじうし株よりのうらやまさんとの
十三面と市で川越のうらやまさん
嫁と違へるうらやまさん世とすく涼川の
八幡町で産まると世とすく涼川の
仏の寺り秩父坂赤もとすく涼川の
て。□にまゝどやうもまゝのうらやまさん
△何のうらやまさん様とすく涼川のうらやまさん

けまのいしおまね大せうとおのうらやまさん
毎一坊ありあつて今の安楽せめて、土地
の由恩送りあり女中や嫁とすく涼川の
教訓の物とありあつてのうらやまさん
女の性いゝあひがりのうらやまさん
片よおちをねるが飲のおひとあつて
いゝうらやまさん
うすくまけおひでんげいあつておひでんげ

小みちをへたぐい法まがちあど人情を中
江戸の渡世おひいを大坂の娘市まのお場おまわをま
の凡俗格やうぶくの田舎女とえくじつでもちまも
あふみ侍他女中もありまが年
流なががすさ女の飛信師を繪えをひひ
ともいひいし中より下れへちちてふん
鞠まり友世が力と娘とせいしちむそよめす
もすあまのおくく支さい智ち教くわうの肉にくからま

る物とらまらのが能い筋しなの癖くせひものま
種たね針はりとらや小糸の始末まら高世たかよ世よは
まらぬまらと船ふねの夫おとこの墓かぶつ今いまおくは
あてまらといひまらうゆりまらま
屋やあものもの何なにもあまらんぬいつけ
甲か丸まる二十にじゅうをまら皮かわのつぐみまらあけまら
むいそまてやりまら戸とがたうたうまらあ
づま戸と櫛くしをまらけかんざりまらあ

とわらわのむねにのぼるてんかきいんせむ
わらわのむねにのぼるてんかきいんせむ
あつてまゝ町へまららうとあつてまゝ
らうへいへう屋つと残はれを後へうへと
さもあふれある顔付と乃新人の世一回あ
耳へも文あさういしとるあ瓶よわらうとせう

けさのぼのんでいへおのりあつてあつて
お老あいらいその町亭ま^{やう}いひいぬ何と
かさげお戸^ど掲^かへ^かうう^う新^{しん}ふ^ふとさとあ
ちやくと笑ひ残が出あつて芝居と残ざり
茶舟とかりてもあつてよ出るやうなれ町で
うてまゝの文残又おな天下^{てんか}書^しての具焼
あつてわくがうけをむまよあれむあつて
さうりやふとんとさあふよあつてあつて

せもあへく人のためにおでもふばうひ業をづうく
 強針のさも大さうあうむぢちうこうらとひのむわ
 して由のせびせうしむむ吾白りのをき掃
 除らうらふお客でもあつ対らうと投入たぐ
 せうく吸扱の塩梅あじどい祝まつり蓋がけの丸合せまるあはせをやすくて
 あら飛ときの出で身みあつらひ大おほきあまの身み物ものり
 又また無なのくく中ちゆううう下げああそそかかああめ
 ぼぼ沈しんまま乃の屈くつ任にんくく足あててなりなりんんととああぐぐめ

身みととしてしてととももゆゆめめととんんああららばば女によよの
 いいぬぬららぬぬとと巾きん塗ぬりり結むすとと足あ鞋せのの勢せうとと
 儉けん物ぶつとと巾きん世よ上のの名な身みととんんくく離なとと居い
 屋いああありありとともも賣うれれとともも結むす句くかかとといい
 身みとと食くひひ世よののももととしてして出で身みととののややすすままん
 場ば町ちゆうああらら所しよのの芝しば居いととんんああららととううららのの可かりり
 ちちややせせぬぬよよ 丈はちち三さん百ひゃくああのの金かねががああけけままじじんん一いち生せい
 むむののんん本ほんととあありり朽くととんんよりより只ただ今いま切き後ごををこ

眞女の仕内ま侍者がお七よほれと吸きけ
 たどと世うすて海ら狂ふ。舞臺へ洞あんと舞う
 のうれへ侍え抱なうぬものいあるよその中一
 ぬの接女ぬの三朝うごむたさうぬらうと
 を人けらうらうんくく顔てぶらうらうと
 出して時くあつとあつらうにゆめめてんら
 志あつらうあつらうのこころぬらうと
 らぬていざんよむじう此仙魚が眞女ゆめい

ぢやうとていざんよむじうとて能とぶるあま
 是してあやせいよ抱ありの志らん狂ふ
 も長あまの東もあつらうはさうまぬあま
 のいざんよむじうのあまの留りや親あまの
 えらうの磨くのさうまらうらうのちんあんかんの
 ちんあんかんの抱ありの身へさうまぬあま
 くひ大せらうな勿辨ちの眞加まのあま
 まあまらう。涌てあつらうあまらうのあま

もかんづきもかんづきも小松とびんづきもつりやせあは
 てどつりさんあうさせる軽舟の来るまでぬ嫁の
 三日むめと世とで姑とそいれど三日ちのともはめ
 め共ありがといふんと取身あよむよりてはる
 又目と申ひあく。機とつらばて鬼神ていある
 まい。情が出来いそまんまやう。かとい。我子よ
 はれはへ。まうまの答いとい。曲る人の何は
 とや。古ひ降るりももころる。嫁はらまの

目よりびんづき。内の振をあまうあ。おまう。
 おらる。嫁つりやゆるとかく。親直の内り
 わら。たいたもやくまのあが。やんの家。まを
 みが。よ。斗。は。入。て。市。亭。の。あ。ち。ん。く。よ
 系とと。斗。し。も。こ。親。ま。が。邪。た。よ。ぬ。振。を
 湯。が。出。る。と。化。人。の。う。あ。さ。ら。が。出。や。と。欲。か。お
 傳。よ。や。つ。さ。も。ら。さ。つ。ら。と。つ。ち。そ。こ。で。嫁。は。が。お
 て。出。ち。さ。つ。や。す。む。ひ。の。と。茶。う。ん。よ。茶。う。ん。乃

ありがんさいめと。梅のこみで流げあち。仲人
 あり大屋を立命よと。く。あねとあまひよ
 んあまひよ。後梅もあまひよ。世あらわあま
 親へのあまひよ。あまひよ。あまひよ。あまひよ。
 けいもあまひよ。あまひよ。あまひよ。あまひよ。
 りあまひよ。あまひよ。あまひよ。あまひよ。
 ね。何のあまひよ。あまひよ。あまひよ。あまひよ。
 てあまひよ。あまひよ。あまひよ。あまひよ。百人

しあまひよ。あまひよ。あまひよ。あまひよ。
 波のあまひよ。あまひよ。あまひよ。あまひよ。
 ねとあまひよ。あまひよ。あまひよ。あまひよ。
 けいもあまひよ。あまひよ。あまひよ。あまひよ。
 りあまひよ。あまひよ。あまひよ。あまひよ。
 ね。何のあまひよ。あまひよ。あまひよ。あまひよ。
 てあまひよ。あまひよ。あまひよ。あまひよ。百人

ちとくく内務もさうなうも北高地の探上げく
 ありあつていつまでも江戸をまわく△
 あり去地へ居あつる始末をさうあつてさう
 持らさしあよ人を奴ふよ後を精藉してさ
 されあつるがいついひあよをさあ源氏さ衣
 とみをさあよさくもいせんと和ふ一流のお
 のりさよくらあん名と情とも細あつりしあ
 居あつる内へ六神の借ぐる縁の徳あひあつる

三九度あつて回りの探でも天がトれりや
 一何が伝はつてさつて二つよとさつあ
 がかのれくが身の新様二月まもあつるの
 ちりもあつてさつあよのあよあつてさつあ
 より男あつてさつあよのあよあつてさつあ
 ちりもあつてさつあよのあよあつてさつあ
 るあつてさつあよのあよあつてさつあ
 あれがさつあよのあよあつてさつあ

と持ちていあんもあめむい骨。それ持てい親
もへ火おけおんやくのらづき。及い麻の考り
もほい平仮名の教訓よ出てある。えあさるま
ちりつものふもある。徳てんよ花のそいめ
里もあると古さあのみあり。心と徳の
たよ入き神めよして居あさるあ。まねま
まもつちがもめて天下をれてのよ天うごま
うりくはめようけまま。芝居役志むりり

評判で出世するものてあ。はくみくす
やううてもあその娘はあともあ。いふが
よいといよりあさりのさ。やまが孫りは乃
福とあり。結納の約とあつていむ。程
あよ婚礼床を置その後よあつと。ま。芝
居よりあも。ろひ。た。君さ。や。世。年。り
せん三五。一。や。嫁。よ。あり。す。ぬ。一。こ

安永九年庚子正月吉日

東都書林本所相生町二丁目清水宗兵衛

